

災害時のドローン活用へ

秦野市と平成 29 年 8 月 28 日「災害時における無人航空機を活用した防災協力体制に関する協定」を締結した。

かながわ自主防災航空（湘南ドローン倶楽部）
<http://www.kanagawa-heli.com/>



4



3



5

3 ヘリコプターの操縦技術をドローンに生かす「湘南ドローン倶楽部」代表の山口さん 4 昨年の防災訓練では、道が寸断されたと想定した上幼稚園からのSOSの文字を空撮 5 熊本地震ではドローンが断層の様子をとらえた（出典 国土地理院）

ドローンだから見えるもの

人が立ち入れない場所に

空に舞い上がり手軽に空撮ができるカメラを搭載した無人航空機「ドローン」の活躍の舞台が広がっている。離島への物流、建設工事の測量など幅広い分野での活用が進められている中、防災の分野でも注目されている。

「人や車が近づくことができない孤立地域の状況を、いち早く把握できると話すのは「湘南ドローン倶楽部」代表の山口好一さん（67歳・堀川）。平成15年に「かながわ自主防災航空」として本市と協定を結んでから、防災訓練にヘリコプターのパイロットとして参加し、本市の防災に長年携わってきた。ドローンの操作にはヘリコプターの操縦技術が生きているという。上空から得られる情報の重要性を感じてきた山口さんは、ドローン

の防災への活用を期待を寄せる。

「ヘリコプターと違い、現場に限りなく近づき、細部まで撮影ができます。視界が悪い気象条件でも飛ばせるんですよ」

最大時速72kmの速さ、リアルタイムで消防などと映像を共有でき、指示を受けながら捜索できるという山口さんのドローン。人の足では時間がかかり、二次災害の危険がある場所での行方不明者の捜索に役立つと話す。

また、秦野のように山に囲まれている中で、山林に取り残された人を捜索するとき、ドローンの先進技術が力を発揮すると山口さんは言う。

「熱を感じる赤外線カメラを使えば、体温から人を見つけることができるんですよ。GPSが搭載されていれば、発見場所も正確に分かります」

熊本地震では、土砂崩れや横滑り断層を鮮明に映し出し、テレビを通していち早く全国に被害状況を伝えた。ドローンは、すでに実際の現場で活躍している。

秦野の空に

今年8月に、「かながわ自主防災航空」は市と防災協定を締結。今年も防災訓練にドローンで参加するなど、本市の防災に空撮の技術を生かしていききたいと山口さんは意気込む。

また、防災だけでなく、道路整備の記録写真、空撮の映像での秦野の魅力発信など、他の分野でも活用を広げていくために、まずは、技術を行政に伝えていきたいと話す。

「災害時に私一人では対応できないですから。官民一緒にドローンの可能性を広げたいですね」

孤立地域への接近、低空飛行による鮮明な映像など、防災に対する新たな強みを持つドローン。操作技術や性能が進み、災害時の空にドローンが舞い活躍する光景が当たり前になる日もそう遠くない。

